

## 2 参集式・歓迎レセプション

10月26日12時から、ホテルニューオータニ東京「鳳凰の間」において、第43回「東南アジア青年の船」事業参集式を行い、続いて13時から歓迎レセプションを行った。

参集式では、始めに加藤勝信内閣府特命担当大臣（少子化対策、男女共同参画）から挨拶があり、続いてPYを代表してMr. Norhidayat Bin Haji Ahim（ブルネイ

YL）がスピーチを行った。

歓迎レセプションでは、石原宏高内閣府副大臣が挨拶し、その後、武川光夫内閣府審議官が乾杯の発声をした。

各国NLとPYは、第43回「東南アジア青年の船」事業の始まりに心を新たにしつつ、初めて会う友人たちと歓談を楽しんだ。

## 3 日本・ASEAN ユースリーダーズサミット

### (1) 概要

10月30日～11月3日、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、日本とASEAN各国及びASEAN各国相互の連携を強化するため、より多くの青年が日本とASEAN各国を結ぶネットワークに参加することを目的として、ディスカッション及び文化交流から成る宿型プログラムである日本・ASEANユースリーダーズサミット（YLS）を、駐日ASEAN各国大使館及び東南アジア諸国連合貿易投資観光促進センター（国際機関日本アセアンセンター）と連携して実施した。

### (2) 開会式

11月1日13時20分から、カルチャー棟大ホールにて、駐日ASEAN各国大使館代表者及び関係者列席のもと、YLS開会式を行った。始めに、豊田俊郎内閣府大臣政務官が挨拶した。次に駐日ASEAN各国大使館を代表して、駐日インドネシア大使館臨時代理大使のDr. Ben Perkasa Drajatが挨拶した。引き続き、PYを代表して、Mr. Noor Mohd Azam Shah Bin Atan（マレーシアYL）が挨拶した。

開会式及び日本・ASEAN文化交流プログラム（パフォーマンス、展示）には、公募による一般来場者約150名が参加した。

### (3) 日本・ASEAN文化交流プログラム

#### a. パフォーマンス

11月1日14時から、カルチャー棟大ホールにおいて、「日本・ASEAN文化交流プログラム」を開催した。日本とASEAN各国のPYが「日本・ASEAN文化交流プログラム」のテーマである“Let's celebrate the 10th anniversary! (YLSの10周年をお祝いしよう!)”の下に各国3分間の文化紹介（パフォーマンス）を行った。各国PYは鮮やかな民族衣装を身にまとい、歌や踊りなどで会場を魅了した。そして、各国パフォーマンスの最

後には11か国22名のPYとLY 2名が合同パフォーマンスを披露し、盛況のうちに終了した。



#### b. 展示

パフォーマンスに続き、11月1日15時15分から、国際交流棟レセプションホール及び国際会議室において、各国を紹介する展示を行った。

レセプションホール及び国際会議室にそれぞれ6ブースを配置し、参加各国及び国際機関日本アセアンセンターに1ブースずつ割り当てた。ASEAN各国の展示ブースは、各国PYが駐日大使館の協力を得て準備し、各国の政治・経済・社会・文化などを紹介した。またLYも担当



国ごとに準備に加わり、各国PYとの交流を深めた。各国とも相互交流が可能な伝統的な遊び・踊りなどを紹介し、参加者がブースを回することでPYとより身近に交流できるよう工夫した。また、レセプションホールには、スナックコーナーを設け、参加者は各国の珍しいお菓子などの試食も楽しんだ。

#### (4) ディスカッション

YLSにおけるディスカッションのテーマには「青年の社会活動への参加～あなたがより良い社会を創る主役です～」を設定した。日本とASEAN各国の青年が、自身を取り巻く地域課題に目を向け、より良い社会について議論することで、その社会の実現に向けて、青年がどのように貢献できるかを見い出し、今後の社会活動への積極的な参加へとつなげることを目指して実施した。

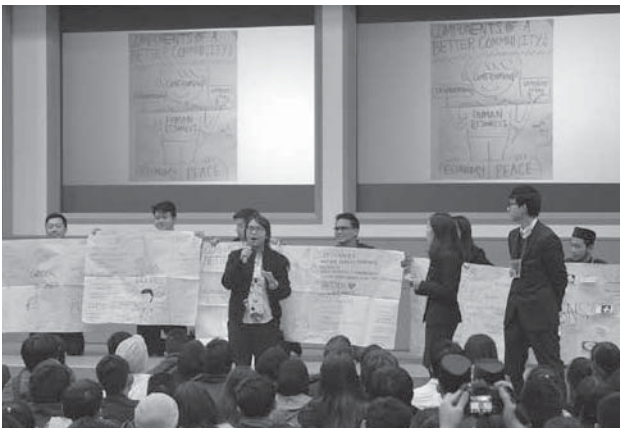
LYを対象として、10月30～31日に、英語によるディスカッションのための講座を行った。LYはYLSディスカッションの重要なポイントと、英語でのディスカッションの基礎を学び、練習を行った。

10月30日夜にはPYが合流し、8つのディスカッショ

ン・グループ別にLYとPYを交えたディスカッション・グループ活動を行い、自己紹介やアイスブレイキング、テーマについての意見交換を行った。

11月2日の午前中には、ディスカッションテーマについての具体的な事例や考察を全体で共有し、ディスカッション活動の基盤とすることを目的として、基調講演を開催した。特定非営利活動法人国連UNHCR協会の中村恵氏が、「社会で担う役割を求めて」と題する約1時間にわたる講演と質疑応答を行った。その後、コーディネーターのリードによりグループ別ディスカッションを行った。LYにとっては、ディスカッションのテーマについての様々な見解を得る機会となり、また、PYにとっては船内におけるディスカッション活動への有益な導入の場となった。

同日午後、各ディスカッション・グループはディスカッションの成果を全体会にて発表した。参加者は、より良い社会を具体的にイメージし、また、その実現には青年が大きな役割を担っているという共通認識を持ち、それに向けて各自が担える役割と今後の活動についての考えを深めた。



## 日本・ASEANユースリーダーズサミット2016 基調講演

## 「社会で担う役割を求めて」

## “In Search of One’s Role in Society”

中村 恵氏（特定非営利活動法人国連UNHCR協会）

日本・ASEANユースリーダーズサミット2016に集った皆さま、おはようございます。海外からの参加者の皆さま、日本によろこそおいでくださいました。

ASEAN10か国と日本の青年を前にお話しするこの機会をいただき、大変光栄に思います。日本・ASEANユースリーダーズサミット2016の主催者、内閣府、（一財）青少年国際交流推進センターに対して、私自身の経験や思いを皆さまと分かち合う機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。



まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。名前は中村恵と申します。1982年、34年前になりますが、第9回「東南アジア青年の船」事業に参加し、当時のASEAN5か国であったインドネシア、シンガポール、マレーシア、タイ、フィリピンを訪問しました。1996年に第23回のナショナル・リーダーとして、ブルネイとベトナムを含むASEAN7か国を訪問しました。2002年にはラオス、ミャンマー、カンボジアを含む10か国がそろった第29回に、アドバイザーとして再び乗船しました。このように、これまでに3回乗船させていただき、この事業がどのように進化してきたのかを見てきました。

私自身のキャリアとしては、1989年に国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に就職し、UNHCR職員として、スイスのジュネーブ、東京、ミャンマーのラカイン州で勤務しました。2000年にUNHCRを退職し、民間からのファンドレイジングを通じてUNHCRを支援する非営利組織である国連UNHCR協会の設立に関与しました。それ以来、協会職員として勤務しています。

今日は、このサミットの基調講演として、皆さんが取り組んでいるディスカッションに役立つトピックをいくつか提示したいと思います。

## ■ コミュニケーションのツールとしての英語

まず初めに、質問をさせていただきます。答えが「はい」の場合には手を挙げてください。

1. このプログラムに参加する前に、外国に行ったことがありますか。（聴衆の多くが挙手）
  2. 英語をコミュニケーションのツールとして使う自信がありますか。（聴衆の半分ぐらいが挙手）
- どうもありがとうございます。

このプログラムでは、英語が皆さんのコミュニケーションのツールです。英語を難なく使う人もいれば、話したり理解したりするのが難しい人もいるでしょう。私たちの共通の目的は良いコミュニケーションであることを覚えておいてください。たとえ流暢に言葉を話せても、相手に自分を理解してもらえなければ、意思の疎通がうまくいかなかったこととなります。そのため、メッセージを英語でお伝えする前に、私は皆さんについて少し知っておきたかったのです。

私は英語圏で生活したことはありません。日本の大学を卒業してから、フランスで1年間学生生活を送りました。その後、仕事をしながら、英語力をみがきました。しかし、ジュネーブにあるUNHCR本部で働き始めた頃、あるイギリス人の同僚からこんなことを言われました。「恵、ここではきちんとした英語は身につかないわよ。色々な英語が使われているから」

まさにそのとおりでした。UNHCR本部でのおもしろい体験をお話します。ある時、私は組織内のニューズレターを担当し、イングランド、スコットランド、アイルランド、アメリカ出身の同僚たちから記事を集めました。私のカナダ人の上司は、そんな同僚たちが書いたすべての記事に手を入れました。各記事を同僚たちに確認してもらうために戻したところ、その上司の直し方が気に食わないらしく皆が文句を言っていました。どうやら「正しい」英語というものではなく、誰もが自分の英語は正しいと信じていました。この経験から私は、少なくとも国連という場、あるいは母語ではない話し手同士では、コミュニケーションのスキルが、いわゆる「正しい」英語よりも大切なのだ学びました。コミュニケーションのスキルとは、聴く力、言葉の選択、様々な活動の場での友好的な態度であり、最も重要なのは笑顔です。

## ■ ディスカッションのための3つの視点

今年のディスカッションテーマは「青年の社会活動への参加～あなたがより良い社会を創る主役です～」とのこと。この興味深いテーマをもとに、様々な社会的な課題を話し合えるでしょう。そこで今日は、私自身の経験から、皆さんが爽り多いディスカッションをするために役立つヒントになるような話を、お伝えします。

まず「視点」という話から始めたいと思います。今回のように、国際的なディスカッションや対話の場で意見を発表する時、私たちは自分の国を代表して、国という視点から話そうとする場合が多いものです。私の場合、これまでの国際的な経験から、3種類の視点を学びました。ひとつずつ説明します。

### 1. 国の視点

最初に、国という視点について。原則として、この世界は国々によって構成されていて、普通、私たち一人ひとり少なくともひとつの国家に所属しています。「東南アジア青年の船」事業のような国際的なプログラムにおいて、私たちは各国について語り合い、それぞれの情報交換をするものです。

1982年に、私は日本参加青年の一人に選ばれました。ディスカッションの準備として、自国の様々な社会制度や統計についての情報収集をしました。ディスカッションの場では、情報交換をして、質問に答えました。その頃、私はまだ大学生で、知識は増えたものの、なんとなく薄っぺらな感じがしていました。その時に何を話したのかも思い出せません。

第9回「東南アジア青年の船」事業の後、私はロータリー財団から奨学金を得て、フランスの大学で1年間勉強しました。この時は、日本の参加青年の一人ではなく、私はフランス人や留学生の中に一人混じっていました。勉強以外に、様々な機会をとらえて、茶道、生け花、書道といった日本の伝統文化を紹介しました。書道以外は、日本で数回学んだだけだったのですが、フランス社会では、「日本人であること」で自分が特別な人物であるように感じました。しかし、日本に戻ると、私は日本人1億2000万人の一人でしかありませんでした。なんとなくですが、フランスに滞在していた時に味わった自分の特別の存在感がなくなったと感じました。

国籍は自分のアイデンティティとして使えますが、自分自身を表現するには限界があるのだと思いました。

### 2. 国際的な視点

次に、国連という職場で学んだ国際的な視点についてお話しします。

日本で数年間働いた後、私は国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に就職し、1989年3月に、ジュネーブ本部で働き始めました。初日に人事部で、「宣誓書」に署

名するように促されました。そこに記されていた言葉を正確には覚えていませんが、次のように宣言することを誇りに感じたことをはっきりと記憶しています。「国際公務員として、私は自分の国の利益ではなく、国際社会のために行動します。」

UNHCRの同僚たちは、世界各地から来ていました。UNHCRは、紛争や迫害のために自国を逃れなければならなかった難民を支援する人道組織です。同僚の中には、自分自身が難民の人もいました。私の最初の上司はスウェーデン国籍でしたが、元はアフリカのエリトリア出身の方でした。彼とその家族はどこかの国に所属しているというよりも国連というコミュニティの一員であるように見えました。皆と共に働いている時、普段は各国籍を気にする必要はありませんでした。私たちは同じ事務所で同じ目的のために働く同僚でした。

数年後、私は国連のコミュニティに居心地の良さを感じてはいましたが、同僚たちが口にした次の指摘が心に引っかかりました。「私たちは国連の文化に居心地の良さを感じているけど、自分の国に戻った時に居心地の悪さを感じるようになってきた。この多文化の雰囲気は今を楽しんでいるけれど、最終的な居場所がわからなくて、そのうち落ち着かない気分になってくるかもしれない。」

皆さんは「地球規模で考え、地域に根差して活動する（think globally and act locally）」というスローガンを聞いたことがありますか。たとえ地球規模で考えたくても、私たちには基盤となる居場所が必要です。私の場合、いろいろと考えた末に、日本に戻ることを決心しました。

### 3. 個人の視点

3番目に、個人の視点について話したいと思います。

ジュネーブで4年近くを過ごした後、私はUNHCR駐日事務所に転勤し、そこで自分の国について多くを学ぶとともに、社会の様々な方々とのネットワークを広げることができました。この期間に、私は休暇を取得して、第23回「東南アジア青年の船」事業のナショナル・リーダーを務め、その後にミャンマーの奥地に赴任し、現場の活動に従事しました。



ASEAN7か国からのナショナル・リーダーと共に、第23回「東南アジア青年の船」事業に参加した青年たちの間に友情が育まれるように、力を合わせて働きました。にっぽん丸の船上で撮影した写真をご覧ください。左から、シンガポールのジョンさん、インドネシアのカシムさん、フィリピンのキットさん（にっぽん丸ソングの作者です）、私のよき友人であるタイのレックさん、管理官の笹島さん、ベトナムのロンさん、マレーシアのカイラニさん、ブルネイのマリックさんです。私たちはあまり連絡を取り合ってはいませんが、同じ時と経験を共にしたことによって、お互いをとても近く感じます。皆さんの中に彼らを知っていたり、会ったりする機会がある人がいれば、ぜひよろしくお伝えください。

1997年、私はミャンマーのラカイン州にあるUNHCRのフィールド事務所へ赴任しました。私の赴任先は、ラカイン州の北部にあるマウンドーという奥地の町でした。ヤンゴンから飛行機、スピードボート、トヨタのランドクルーザーを乗り継いで丸一日、雨季には2日間もかかりました。

そのフィールド事務所はいわゆる”non-family duty station”と呼ばれるところで、誰もが家族を置いて一人で赴任します。同じ宿舎に事務所と居住区画が共存していました。15名程の国際職員が常時一緒に暮らしていました。私の上司はタイ人の女性で、同僚たちは、フィリピン、中国、スーダン、エチオピア、ソマリア、マラウィ、イタリア、フランス、クロアチア、カナダ、アメリカなどから来ていました。アメリカからの同僚の一人は、元々ベトナム出身でした。まさに国際的なコミュニティであり、私たちは仕事でも日々の生活でも、そこで生き抜くためにお互いに助け合いました。

外の世界とのコミュニケーションさえ難しい課題でした。eメールもファックスもなかったのです。衛星電話はあったのですが、数か月間使えないこともありました。仕事を終えてからすることもあまりなく、しゃべったり、ビデオ鑑賞をしたり、テレビでCNNニュースを観たり、宿舎のまわりを散歩したりしていました。

同僚の間で良好な人間関係を保てるように最善を尽くしましたが、難しい時もありました。自由時間にはよくおしゃべりをしていたので、私は多くの同僚から個人的な話を聞くことになりました。

エチオピア出身の同僚からはエチオピアの近代史を教わりました。彼はとても優秀なUNHCR職員ですが、若い学生時代に共産主義を信奉して、革命の時に、地主だった自分の父親に土地の譲渡を迫ったそうです。彼の父親は極貧の中で亡くなり、その頃はよく自分の夢に出てくると話していました。彼自身、その理由がわからないと言っていました。おそらく深いトラウマになっていたからでしょう。彼は、まだエチオピアにいる家族や親戚のために、失った土地を少しずつ買い戻していると

明かしてくれました。

中国人の同僚は、1966年から76年の文化大革命の時に家族が味わった厳しい経験のことを話してくれました。さらに、私がマウンドーを去る前日に、彼女は私に、日本人について自分の中に隠していた感情を打ち明けてくれました。彼女は、戦時中の日本人兵士の話がたくさん聞いてきたので、日本人に対して否定的なイメージを持ち続けていたそうです。しかし、個人的に知り合ったことで、彼女は人を国籍ではなく個人として判断できるようになったと語ってくれました。彼女から、私たちはこれからもずっと友達だという言葉聞いて、とても嬉しく思いました。

背景は異なっていますが、同僚たちが普遍的な問題で悩んでいることがわかるとおもしろく感じたものでした。例えば、スーダン人の同僚は、母親と妻の難しい関係についてよく嘆いていました。それでも、彼は賢者であり、私に自分の判断や直感を信じる大切さを教えてくれました。それは、先進的な社会で便利なツールにばかり頼っていると、衰えていってしまうものかもしれません。

私たちはここに、ASEAN10か国と日本から集いました。このコミュニティでは、皆さんは個人としてふるまってもかまわないのです。出身国の国益を代表する必要はありません。個人どうしの交流を通じて学び合うことができる特別な機会です。例えば、私は皆さんの家族の歴史に耳を傾けたいと思います。その歴史は社会情勢の影響を受けざるを得ないものです。友達の話の方が、本よりももっと興味深いものだと感じるはずですよ。

ここまでをまとめますと、私はディスカッションのために、国の視点、国際的な視点、個人の視点という3つ視点を紹介しました。どの視点も否定するものではありません。また、今回私は、宗教あるいは信仰を基盤とした視点については触れませんでした。皆さんの中には重視されている方もいるでしょう。私はただ、皆さんが顔をつき合わせながらディスカッションを進めていく際に、様々な視点に注意を払っていただくことを提案したいのです。そして、自分自身について話し、他の人々の経験やアイデアに耳を傾けてみましょう。

### ■ UNHCRの活動

さて、UNHCRの活動について少し紹介させていただきます。

UNHCRは、第2次世界大戦直後の時期である1950年に設立され、故郷を追われた数百万人の欧州人を支援しました。65年以上を経た現在、この組織はなお世界中で難民を保護し支援しています。21世紀になって以降もアフリカ、中東、アジアで大規模な難民危機にUNHCRは対処しています。UNHCRは、紛争によって国内で避難した人々や、無国籍の人々への支援も求められようになってきています。

過去、私たちの地域でも大きな難民問題がありました。それをよく覚えている方もいるかもしれませんが、にっぽん丸がこれから航海する海でそんな問題があったことをまったく知らない人もいるでしょう。関係諸国間の協力を経て解決に向かった難民問題の成功例として、このケースを紹介させていただきます。

1975年以降、ベトナム、ラオス、カンボジアから、300万人以上が母国を後にしました。彼らはインドシナ難民と呼ばれ、東西冷戦の期間、西側の国々が彼らを受け入れました。日本でもあまり知られていませんが、この3か国から1万1000人以上が日本に定住し、その中には今も日本の市民として生活している人たちがいます。

1989年に冷戦が終わった後、第三国への移住が以前より困難となり、難民にはそれぞれの国への帰還が奨励されました。UNHCRは、カンボジアへの難民40万人の帰還を支援しました。2000年にタイからラオスへの帰還が完了し、香港にあったベトナムセンターが閉鎖されたことで、25年間にわたったインドシナ難民問題の終結が示されました。難民問題の解決には時間がかかりますが、関係諸国が力を合わせて努力すれば、このような難しく長期の問題を終わらせることはできるのです。

1996年に、私は第23回「東南アジア青年の船」事業の一員として、その頃ベトナム共産党の書記長だったドゥムオイ氏を表敬訪問する機会を得ました。それは、ベトナムが「東南アジアの青年の船」事業に初めて参加した年でした。私はドゥムオイ氏のスピーチに感銘を受けました。彼は、かつて長く困難だった歴史に言及しつつ、平和な中で行われるこの国際交流プログラムにベトナム青年が参加している姿を目にした喜びを話されました。

戦時中、多くの日本の兵士が戦闘のために東南アジアに送られました。UNHCR職員としてミャンマーで働いていた頃、私は自分が滞在していた地域に、第二次世界大戦中に日本人兵士が来ていたと聞きました。ミャンマー人のアシスタントはある鉄橋を指して、あそこで日本軍とイギリス軍が衝突したと話してくれました。その時、私は自分が兵士ではなく人道支援のために働いていることを幸運だと感じました。自分を戦いではなく平和を築くために使える方がよっぽどいいですよ。

## ■ 社会に貢献するために

さて、ここからはこの17年間に私が従事してきたことについてお話したいと思います。

誰にでも時折、人生の岐路が訪れます。人生とは選択の連続です。ひとつの道を選ぶと、他の選択肢をあきらめることになります。私にとって、ミャンマーのUNHCRフィールド事務所での勤務はとてもおもしろかったものの、体力的にはきついものでした。体力のある同僚たちには驚かされました。私自身は精神的には安定しているのですが、2年か3年ごとにUNHCRのフィー

ルドを転々とすることになる同僚たちの肉体的な強さを自分は持ち合わせていないと思いました。

1999年に私はUNHCRから特別休暇を取り、次の道を探すために東京に戻りました。日本を基盤としつつ、これまでのキャリアを活かせる役割を見つけたかったので。その頃、UNHCR駐日事務所では、UNHCRのための民間からのファンドレイジングを担う国内委員会の設立を計画していて、私はその設立準備を助けてほしいと依頼されました。ある組織をゼロから立ち上げることは大変かもしれないものの、わくわくしました。国連も、かつて誰かによって創設された組織なのです。

国連UNHCR協会は、2000年10月に職員3人で運営を始めましたが、今では約100人もの同僚がファンドレイザーとして、日本各地で共に働いています。これまでの努力によって、毎月の継続的な支援者は7万人を超えました。公共の場所や商業施設で、私たちの活動を目にされたことのある方もいるかもしれません。私は難民問題から多くを学ばせていただいたので、UNHCRの継続支援者になることは、UNHCRを支えるだけでなく、支援者にとっても有益であると強く信じています。

残念ながら、世界には次々と紛争が起きています。シリアでは2011年に紛争が始まり、これまでに480万人が難民として隣国に逃れています。いったん紛争が始まると、社会に平和に戻るまでには20年以上かかるかもしれません。しかし私は、どのような紛争も終結し、一人ひとりの努力によって平和は再建できると信じています。

ここで、私たちがオンライン上で展開している「つなごう難民プロジェクト」をご紹介します。今日、配布したチラシをご覧ください。スマホで、そこに記されたウェブサイトアクセスしてみてください。英語版もあります。そこには、ヨルダンで暮らしているシリア難民の笑顔が紹介されています。これは、難民の人々もあなたや私と同じこの世界の一員であることを示す新しいプロジェクトです。ぜひ試してみて、友達にも紹介してください。一人ひとりのささやかな行動が、世界の変革につながります。

## ■ 私たちの責任

ここに、私たちはASEAN10か国と日本から集っています。もうすぐ船のプログラムが始まる方々にとっては、ひとつの船で共に生活することが、この地球上での共存のシミュレーションだと言えるでしょう。皆さんは、国籍とか文化とか宗教といった違いを乗り越えて共に生きる方法を学ぶための集中訓練プログラムに参加するために選ばれた人々です。外国人と一緒に小さな船室で暮らすことが、限られた空間で共に生きる方法を学ぶためのチャレンジだと言えるでしょう。

皆さんはこのプログラムから多くを得ることでしょ。しかし、皆さんもわかっていらっしゃるように、地

元のコミュニティあるいはグローバルなコミュニティで、なすべきことはまだたくさんあります。このようなニーズにどのように応えていきますか。もちろん、一人ひとりが、プログラム後に自分の場所に何かを持ち帰る責任があります。この特別な機会を使って、できる限り成長し、自分の視野を広げ、何かを自分のコミュニティに持ち帰ってください。そして、残りの人生をかけて、それぞれの役割を果たしながら、この世界をより良い場所にすべく最善を尽くしましょう。

私たち一人ひとりが生まれたのは、この世界で担うべき役割があるからだとは私は信じています。それを思う時、私は第23回「東南アジア青年の船」事業の参加青年の一人だった篠原亜紀子さんを皆さんにどうしても紹介したいと思います。15年前、彼女は第28回事業の管理部門としてプログラムに参加中に、ブルネイで起きた交通事故で亡くなりました。マレーシアとインドネシアのナショナル・リーダーを含めて6人が大切な命を落としました。私はこの2人のナショナル・リーダーと、東京での歓迎レセプションで少しですが楽しい会話をしたことをよく覚えています。

1996年当時、亜紀子さんは19歳で、最も若い日本参加青年でした。規則にまじめに従うというよりも、我が道を行くタイプの人でしたが、才能と活力にあふれていました。

突然に彼女を失ったことはショックでした。しかし、私が知る限り、亜紀子さんはその人生をとおして、社会で素晴らしい役割を果たしました。特に最後の5年間は日本から船のプログラムを支えるために大活躍をしていました。この世を去ってからも、私たちにインスピレーションを与え続けている存在です。

「東南アジア青年の船」事業は、集中訓練プログラムのようなものであり、参加者を精神的にも社会的にも成長させます。ここで、亜紀子さんが第23回事業報告書に書いたメッセージを読ませていただきます。

### 私のSSEAYP1996

とにかくあっというまに過ぎ去った2か月でした。今思うと、すべてが夢のようで、写真に写っている自分が別人のようで、PYsから連絡があると、ようやく自分がSSEAYPに参加したのだと、実感します。

そう、今回私が知り合った多くの人、大切な友人たちこそが私にとってのSSEAYPそのものであり、ずっと残る実感です。私はこのプログラムに、自分を見つめ直し、自分の可能性を知り、また、地球人としての自分を発見するために参加しました。そして、その目的は十分に達成されたと思います。人は他人を通して、社会



に参加して初めて自己を発見することができるのだと知りました。2か月の生活だから、いつもよそ行きの顔をしているわけにはいかない、時には怒ったり、くじけたり、言い表せないほど楽しく幸せだったり、そんなすべてを共有して、一緒に喜んだり、悲しんだりしてくれた（NLとADMを含む）皆と、このような機会を得た幸運に心から感謝します。

2か月間私たちのすべてを包んでくれたにつぼん丸が、もう恋しいです。私たちをつないでくれた歌や、すべての音楽が今でも耳の奥底に残っている気がします。音楽をやっていた良かった、生きていて良かった（おおげさかな？）と、心から思います。もちろん嫌な思いをしたことだってある、でも、嫌な思いをしなければ、本当の幸せ、喜びは解らないのですね。

最後に、みんな、たくさん迷惑をかけてごめんなさい。皆さんと会えて良かった、これからもよろしくお願ひします。（なんだか遺書のようなだなあ、でも、いいや。生まれ変わったような気がするんだもん。）

1996年12月 東京の自宅にて

亜紀子さんのSSEAYP魂がいつまでも私たちと共にあり、そしてSSEAYPの一部であり続けますように。

進行中のこのプログラムは、皆さんが自分を発見するための貴重な機会なのです。

ナショナル・リーダー、今年の事業参加青年、YLS参加ローカル・ユース、ファシリテーター、実行委員会の皆さま、それぞれの役割を果たされる皆さまに心からのエールを贈ります。

一人ひとりが、自分のコミュニティだけでなく、この地球上においても大切な一員であることを覚えていてください。

あせることなく、すべての瞬間を味わってください。どうもありがとうございました。

## 4 ホストファミリー代表者の招へい

訪問国における長年にわたるPYのホームステイ受入れの実績に対して感謝の意を表明するとともに、日本国内活動などの各種プログラムを体験することにより「東南アジア青年の船」事業への理解を更に深め、各国におけるホームステイ受入れを円滑に進めることを目的として、各国のホストファミリー代表者を7か国から2名ずつ、合計14名を日本に招へいた。

ホストファミリー代表者は10月25日から29日までの5日間の日程で日本に滞在し、第43回「東南アジア青年の船」事業参集式に参加したほか、和田昭夫内閣府青年国際交流担当室長への表敬訪問を行った。



ホストファミリー代表者が和田昭夫内閣府青年国際交流担当室長を表敬訪問する  
(10月26日)

## 5 船内公開・出航式

11月4日13時30分から、日本参加青年の家族・友人、事業関係者などを対象として、東京港からの出航に先立って、にっぽん丸の船内公開を行った。

その後、15時15分から、にっぽん丸ドルフィンホールにて、駐日ASEAN各国大使館代表者及び関係者列席の下、出航式を行った。和田昭夫内閣府青年国際交流担当

室長及び佐藤恵一日本青年国際交流機構会長からの激励の言葉を受け、PYを代表してMr. Kaung Myat（ミャンマー YL）が挨拶をした。

出航式終了後の16時00分、にっぽん丸はベトナムに向けて東京港晴海ふ頭から出航した。



出航式にて、和田昭夫内閣府青年国際交流担当室長が激励のことばを述べる  
(11月4日)



出航の見送りに来た家族や友人